

作家名	いけだみつひろ	作品名	trees no.1		
	池田光弘		trees no.1		
	IKEDA, Mitsuhiro				
生没年	1978-	作品名 補足			
出生地	札幌市	制作年	2019 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	130.3×89.4cm		
		取得方法	寄付		
選定年度	令和7年度	エディション			
		号数	評価額	1,300,000 円	

## 作家略歴

1978年札幌市生まれ、京都市在住。2006年、武蔵野美術大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了後、東京を拠点に制作活動を行う。第21回ホルベイン・スカラシップ奨学生。2013年、ポーラ美術振興財団在外研修員に選ばれ、翌年から2015年にかけてベルリンにて滞在制作。2017年より京都造形芸術大学(現京都芸術大学)准教授。旅先などで出あった風景に想を得ながら、それを「再現」するのではなく、絵画自体が鑑賞者の経験や知覚の「場」となることを目指して制作を行う。2005年、新・公募展優秀賞受賞。2007年、VOCA奨励賞受賞。

[個展]location/dislocation(2012年/シュウゴアーツ、東京)、Portrait of Place(2015年/Soka Art Center、台北)、dawn(2020年/Satoko Oe Contemporary、東京)[グループ展]知覚されるアート(2014年/モエレ沼公園ガラスのピラミッド、札幌)、ポーラミュージアムアネックス展 2017-感受と創発-(2017年/ポーラミュージアムアネックス、東京)、リフレクションズ-いつかの光(2025年/札幌芸術の森美術館)

## 特徴

池田光弘は、画家としてのキャリアの最初期から樹木を主要なモチーフとして描いてきた。本作は、東欧を旅した際に森の中で目にしたという、複数の木が一本の木のように絡まりあった光景を題材に制作された。樹皮のディテールまで描き込む樹木の写実的な描写に対して、その背景や周囲には黄色や黒で塗られた抽象的な空間が広がり、さらに画面に散りばめられた彩度の高い絵具のドリッピングによって、絵画の平面性が示唆される。池田は、絵画が描出する「イメージ」とそれを構築する絵具などの「物質」との関係性に関心を寄せ、「物質はイメージを見つめる時には消滅し、またイメージ自体もそれが絵具によって支えられているという意味では虚像であり、現実には存在しない」と語る。本作においては、描かれる対象の「イメージ」と絵具の「物質性」が拮抗する状態を生み出し、絵画にしか生み出し得ない空間を創造しようとした。池田の独自の造形言語がよく表された佳作であり、「森」に関わりのある作品を収蔵するという当館の収集方針にも沿うことから、収蔵の意義が認められる。

作家名	いけだみつひろ	作品名	double scenery		
	池田光弘		double scenery		
	IKEDA, Mitsuhiro				
生没年	1978-	作品名 補足			
出生地	札幌市	制作年	2022 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	120.0×178.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和7年度	エディション			
		号数	評価額	1,950,000	円

## 作家略歴

1978年札幌市生まれ、京都市在住。2006年、武蔵野美術大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了後、東京を拠点に制作活動を行う。第21回ホルベイン・スカラシップ奨学生。2013年、ポーラ美術振興財団在外研修員に選ばれ、翌年から2015年にかけてベルリンにて滞在制作。2017年より京都造形芸術大学(現京都芸術大学)准教授。旅先などで出あった風景に想を得ながら、それを「再現」するのではなく、絵画自体が鑑賞者の経験や知覚の「場」となることを目指して制作を行う。2005年、新・公募展優秀賞受賞。2007年、VOCA奨励賞受賞。

[個展]location/dislocation(2012年/シュウゴアーツ、東京)、Portrait of Place(2015年/Soka Art Center、台北)、dawn(2020年/Satoko Oe Contemporary、東京)[グループ展]知覚されるアート(2014年/モエレ沼公園ガラスのピラミッド、札幌)、ポーラミュージアムアネックス展 2017-感受と創発-(2017年/ポーラミュージアムアネックス、東京)、リフレクションズ-いつかの光(2025年/札幌芸術の森美術館)

## 特徴

池田光弘は、制作における主要なモチーフとして樹木を繰り返し描いてきた。本作の画面中央には仄暗い水辺を思わせる空間がぼんやりと広がり、その左右に1本ずつ、長い年月を生きた趣を湛える木の幹が配されている。これらは同一の樹木の裏と表をそれぞれ描いたものだ。池田は、絵画を通して現実を「再現」するのではなく、自分の目が捉えた具体的・具象的な事物を制作のプロセスを通して抽象化していくことにより、絵画をさまざまなイメージや想像に対して開かれた「場」として機能させようとした。本作でも、一見して具体的な風景を描いているようでありながら、現実の世界ではあり得ない、絵画だからこそ成り立つ抽象的な空間の描出を目指した。

多視点で描いたモチーフを同一の画面に共存させた作品は他に類例がなく、具象と抽象を行き来しようとする実験的な作例であり、「森」に関わりのある作品を収蔵するという当館の収集方針にも沿うことから、収蔵するにふさわしい。

作家名	おおもとやすし	作品名	やまぎりのぎんめいすい		
	大本靖		山霧の銀明水		
	OMOTO, Yasushi				
生没年	1926-2014	作品名 補足			
出生地	小樽市	制作年	1978年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	54.4×24.7cm		
取得方法	寄贈	エディション	59/100		
選定年度	令和7年度	号数	評価額	65,000	円

## 作家略歴

1926年、小樽市に生まれ、3歳で札幌市に転居。1944年3月、札幌光星商業学校を卒業、11月に入隊。翌年10月に復員。1947年、明治大学商学部に進学し、阿佐ヶ谷美術研究所にてデッサン等を学ぶ。1951年、大学卒業後、兄の営む北海道特殊印刷工芸へ入社。青年美術協会にて若い美術家たちとの交流を深め、1954年の日本版画協会への出品を機に本格的に版画家を志し、独学で研鑽を積む。札幌版画協会、北海道版画協会の設立に尽力し、北海道版画界を牽引。市民への技術指導を通じて版画愛好家の育成にもつとめた。モノタイプによる抽象表現から出発し、のちに木版に転向、写実表現を身につける一方、要素をそぎ落とした簡潔な構図と色彩によって北海道の風景を大胆に再構成した独自の自然描写に至る。80年代には繊細な写実表現によって樹々の姿に肉薄し、続く90年代には、山の姿をデフォルメしたダイナミックな造形を追求。一貫して北海道の自然を題材に表現を磨き続けた。1984年、札幌市民芸術賞受賞。1996年、北海道文化賞受賞。2002年、地域文化功労者文部科学大臣表彰。2007年、札幌芸術の森美術館にて「大本靖展 一山の鼓動、樹々のうた」を開催。2014年、逝去。

## 特徴

大本靖が1970年代後半から80年代にかけて手がけていた縦長の画面を特徴とする作品のひとつ。これら一連の作品は、縦長(約55×25cm)の画面に樹木などのモチーフを配し、銀色の絵具で雲や月、雪面などの要素を表現するという特徴をもつ。「銀明水」とは、富士山頂の浅間大社奥宮に湧き出す泉をはじめ、各地の名水を指す言葉だが、本作では大雪山の愛山溪温泉から永山岳・愛別岳方面へ向かう登山道沿いの小沢を示すと思われる。大本は大雪山に魅せられ、幾度も取材に訪れた。本作では、上方から地形に合わせ方向を変えながら流れてくる清水が中央に描かれ、前景、中景にエゾノツガザクラ、イワウメと思われる可憐な高山植物が配される。銀の絵具を用いて装飾的なパターンで描かれた霧が画面を覆い、幻想性を与えている。北海道の自然を終生の題材としながら、牧歌的な写実に留まらず、独自のデザイン感覚で画面に洗練をもたらす大本らしさが発揮された一作。2017年に当館で開催した「大本靖展 山の鼓動、樹々のうた」では、本作(A.P.)を含む縦長の作品10点が出品され、内6点が当館に収蔵されている。

作家名	きたおかふみお	作品名	しだれざくら		
	北岡文雄		しだれ桜		
	KITAOKA, Fumio				
生没年	1918-2006	作品名 補足			
出生地	東京都荒川区	制作年	1970 年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	55.0×39.7cm		
		取得方法	寄贈	エディション	A.P.
選定年度	令和 7 年度	号数		評価額	100,000 円

## 作家略歴

1918 年、東京都生まれ。東京美術学校油画科在学中に創作版画運動の先駆者・平塚運一に学び木版画の道へと進む。中国木刻画の影響を受けた白と黒のリアリズムや、色彩そのものを主題とする抽象表現など作風の変遷を重ねつつ、1955 年に渡仏しエコール・デ・ボザールで木口木版を習得する。翌年 6 月に帰国後は妻の実家のある札幌市に滞在し、札幌版画協会(現・北海道版画協会)設立に尽力、1956 年には全道美術協会会員となる。1964 年、フルブライト交換教授として渡米し、実景に根ざした明快な風景版画へと到達。以後、日本各地の風土を取材し、光と空間の広がりや湛えた叙情豊かな作品を発表し続けた。1988 年、「北岡文雄木版画展」(町田市立国際版画美術館)。1990 年、版画家として初めて日本美術家連盟理事長就任。1993 年、「北岡文雄の世界 光と風の版風景」(北海道立近代美術館)。2007 年、逝去。

## 特徴

本作は平安神宮内庭のしだれ桜に取材し、春のやわらかな雰囲気表現するため雲母を控えめに施している。さらに、桜花や支柱の竹竿にはきめ出しの技法を用いて画面に微細な起伏を与え、対象の質感と実在感を強調している。北岡が京都を主題として制作した一連の作品には、風景に対しても人間性を見出そうとする姿勢が明確に表れている。日本の風景特有の空気や湿度、繊細で変化に富む光と陰影による造形が作用し、自然を単なる景観としてではなく、「人間に対する様に自然に対峙し、静物を扱うように風景を造形的に処理している」と北岡は述べる。また本作では、制作過程で生じる偶然の効果を積極的に取り込み、それを画面構成の要素として活かす姿勢も特徴である。そうした偶然性と構成意識によって、京都の雅やかな情趣が画面に展開されている。北岡の京都風景を扱った作品群の中でも代表的な一点と位置づけられる。作家の制作態度と表現理念を端的に伝える作品であることから、当館収蔵作品としてふさわしいものと判断される。

作家名	きたおかいふみお	作品名	こうげんのはな		
	北岡文雄		高原の花		
	KITAOKA, Fumio				
生没年	1918-2006	作品名 補足			
出生地	東京都荒川区	制作年	1975 年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	44.8×33.2cm		
取得方法	寄贈	エディション	A.P.		
選定年度	令和 7 年度	号数		評価額	100,000 円

## 作家略歴

1918 年、東京都生まれ。東京美術学校油画科在学中に創作版画運動の先駆者・平塚運一に学び木版画の道へと進む。中国木刻画の影響を受けた白と黒のリアリズムや、色彩そのものを主題とする抽象表現など作風の変遷を重ねつつ、1955 年に渡仏しエコール・デ・ボザールで木口木版を習得する。翌年 6 月に帰国後は妻の実家のある札幌市に滞在し、札幌版画協会(現・北海道版画協会)設立に尽力、1956 年には全道美術協会会員となる。1964 年、フルブライト交換教授として渡米し、実景に根ざした明快な風景版画へと到達。以後、日本各地の風土を取材し、光と空間の広がりや湛えた叙情豊かな作品を発表し続けた。1988 年、「北岡文雄木版画展」(町田市立国際版画美術館)。1990 年、版画家として初めて日本美術家連盟理事長就任。1993 年、「北岡文雄の世界 光と風の版風景」(北海道立近代美術館)。2007 年、逝去。

## 特徴

雨中の風景を主題とした本作は、画面手前に群生するミズバショウを中心とした草木を大きく配し、その奥に利尻島の利尻山を望む構図をとる。前景の植物群と遠景の山岳を明確に対比させることで、北海道の自然がもつ厳しさと清澄さを同時に描き出している。斜めに降りしきる雨の表現は、静謐さのなかに緊張感を漂わせている。北岡は北海道の自然に特別な思いを寄せ、北辺に生きる人間への共鳴を一貫して制作に込めてきた作家である。ミズバショウは湿地に自生し春に咲く花で、北岡の語る「あらゆる花が同時に咲く短い春のはかない美しさ」を象徴し、本作の花の描写にも北方の早春への深いまなざしが示されている。また 1990 年 7 月、本作をもとに幌延町新庁舎の陶板壁画《サロベツ原野と利尻富士》が制作され、現在も市民に親しまれている。北海道の風土を象徴する主題と明快な構図、自然への精神的共感を造形へ昇華させた点において、本作は作家の北海道風景表現を理解するうえで重要な位置を占める作品であることから、収蔵にふさわしいと考えられる。

作家名	こまつみわ	作品名	えぞおおかみのすびりつたちはほっかいどうをとぶ		
	小松美羽		エゾオオカミのスピリットたちは北海道を翔ぶ		
	KOMATSU, Miwa				
生没年	1984-				
出生地	長野県埴科郡坂城町	作品名 補足			
No Image		制作年	2026 年		
		技法 材質	アクリル、金箔、ミクストメディア、FRP		
		寸法	(ユニコーン)145.9×165.0×43.3cm、(バイコーン)121.5×143.6×53.1cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和7年度	号数		評価額	30,000,000 円

## 作家略歴

1984年、長野県埴科郡坂城町生まれ。女子美術大学短期大学部で銅版画を学ぶ。卒業後は銅版画家として活動を続けながら、墨絵の制作にも取り組む。2012年頃、前年のニューヨークでの短期滞在を契機として本格的に絵画制作へ移行する。2014年、自作を出雲大社へ奉納。以降、各地の寺社仏閣や史跡に滞在し絵画制作をおこなう。2015年、自身初となる立体作品《天地の守護獣》[有田焼・弥左衛門窯との共同制作]を切尔西フラワーショーに出品したことを契機として同作が大英博物館日本美術ギャラリーに収蔵される。2018年、「福島ビエンナーレ 2018 重陽の芸術祭」(大山忠作美術館)に出品、第一回金獅子狛犬賞。2019年、「Shinto: Discovery of the Divine in Japanese Art」(クリーブランド美術館)出品、一宮市三岸節子記念美術館、富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館で個展を開催。2022年、川崎市岡本太郎美術館で個展を開催。2025年、個展「小松美羽 祈り 宿る」開催(札幌芸術の森美術館、北海道立函館美術館)。

## 特徴

小松はその画業において、各地で神格化され伝承されてきた「神獣」を一貫して表現している。作家としての出発点となった銅版画においては精密な線描によって、そして2012年頃から本格的に取り組むアクリル画においては鮮烈な色彩と特徴的な目の描写によって、人間を導く動物の存在を描いている。2015年、大英博物館に収蔵された有田焼による立体作品《天地の守護獣》の制作を契機に、小松は本格的に立体作品を手掛けるようになる。ほぼ全ての立体作品でモチーフとなるのは番の「山犬」(ニホンオオカミ)だが(例外は2024年に大阪市此花区正蓮寺川公園に設置された作家初のパブリックアート《此花水龍》)、収蔵候補作品ではこのような旧作の系譜を汲みながら、かつて北海道に生息していたエゾオオカミを直接的な参照源としている。本作には、乱獲等により絶滅に追いやられたエゾオオカミへの鎮魂の念と、人間もまた循環し調和する自然界の一部であるという作家の思いが込められている。当館における同作家の収蔵は本年度が初となる。国内外で活躍する作家の多様化する制作活動を特徴づける良作であり、当館のコレクションを充実させるものと考えられる。

作家名	しもざわとしや	作品名	Re-birth いつ		
	下沢敏也		Re-birth 溢		
	SHIMOZAWA, Toshiya				
生没年	1960-	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2025 年		
No Image		技法 材質	陶土、顔料、酸化鋇物、ボード		
		寸法	220.0×220.0×8.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和7年度	エディション			
		号数	評価額	1,400,000 円	

## 作家略歴

1960年北海道札幌市生まれ、在住。1978年より陶芸家の父・下澤土泡に師事。1982年、滋賀県信楽町(現・甲賀市)にて陶芸研修に参加。北海道陶芸協会の設立に携わった1984年頃、京都の前衛陶芸家グループ「走泥社」の作品に出会う。1990年に陶工房 shimozawa を設立し制作活動を本格化。1997年、北海道文化財団芸術家海外研修によりニューヨークのパーソンズ美術学校(Parsons School of Design)に通い、学生の自由な発想に影響を受けた。2001年以降は札幌に加えて全国各地のギャラリーで個展を開催し、国内外のグループ展にも参加。北海道の陶土を素材に、伝統的な作陶の仕事と独自の技法を用いた前衛的なインスタレーション作品の制作とを行き来しながら、造形表現の可能性を追求し続けている。

2009年、札幌文化奨励賞。2011年、北海道文化奨励賞。「下沢敏也 Re-birth 風化から森へII」(札幌芸術の森美術館 中庭・前池)。2013年、『下沢敏也作品集』(中西出版)出版(改訂版が2020年に出版)。2014年、「Sprouting Garden 一萌ゆる森」(札幌芸術の森美術館)出品。2021年、北海道陶芸協会第四代会長に就任。2023年、札幌芸術賞。2025年、「札幌美術展 下沢敏也 origin—土の命脈」(札幌芸術の森美術館)。

## 特徴

ひび割れのある大きな朱色の画面は、作家自身が2023年に訪れたアイスランドの火山を思い起こしたと語るように、太古からの年月の積み重なりで生じた地層や風雪による地割れを想起させる。黒の下地を塗った板に、液状にした粘土である泥漿を撒いて乾燥させ、その後、バーナーで表面を焼き、鉛丹を刷毛で塗り、再びバーナーで焼くという作業を幾度も繰り返す。釉薬のかからない器の素地が露出して火間となるように、下沢は窯を用いない独自の技法で、ひび割れや色の濃淡のある土肌を生み出し、内部から鈍い光を放つ、風化した自然の大地の姿を表した。一見重厚な油彩画のような作品だが、その成り立ちは伝統的な作陶の技術や土に精通した作家ならではの視点に支えられている。

本作は《Re-birth 溢》と並び、当館開催の個展のために制作された大型の平面作品の一つである。「風化から再生へ」と向かう生命の営みをテーマとする下沢の「Re-birth」シリーズでは、当館既蔵の作品のように立体作品が中心だが、本作は2016年頃から作家が取り組んでいる平面作品の最新作であり、コレクションの充実に寄与し得ると考えられる。

作家名	しもざわとしや	作品名	Re-birth たん		
	下沢敏也		Re-birth 湛		
	SHIMOZAWA, Toshiya				
生没年	1960-	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2025 年		
No Image		技法 材質	陶土、顔料、酸化鋇物、ボード		
		寸法	220.0×220.0×8.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和7年度	号数	評価額	1,400,000	円

## 作家略歴

1960年北海道札幌市生まれ、在住。1978年より陶芸家の父・下澤土泡に師事。1982年、滋賀県信楽町(現・甲賀市)にて陶芸研修に参加。北海道陶芸協会の設立に携わった1984年頃、京都の前衛陶芸家グループ「走泥社」の作品に出会う。1990年に陶公房 shimozawa を設立し制作活動を本格化。1997年、北海道文化財団芸術家海外研修によりニューヨークのパーソンズ美術学校(Parsons School of Design)に通い、学生の自由な発想に影響を受けた。2001年以降は札幌に加えて全国各地のギャラリーで個展を開催し、国内外のグループ展にも参加。北海道の陶土を素材に、伝統的な作陶の仕事と独自の技法を用いた前衛的なインスタレーション作品の制作とを行き来しながら、造形表現の可能性を追求し続けている。

2009年、札幌文化奨励賞。2011年、北海道文化奨励賞。「下沢敏也 Re-birth 風化から森へII」(札幌芸術の森美術館 中庭・前池)。2013年、『下沢敏也作品集』(中西出版)出版(改訂版が2020年に出版)。2014年、「Sprouting Garden 一萌ゆる森」(札幌芸術の森美術館)出品。2021年、北海道陶芸協会第四代会長に就任。2023年、札幌芸術賞。2025年、「札幌美術展 下沢敏也 origin—土の命脈」(札幌芸術の森美術館)。

## 特徴

ひび割れのある大きな黒色の画面は、作家自身が2023年に訪れたアイスランドの大地を思い起こしたと語るように、太古からの年月の積み重なりで生じた地層や風雪による地割れを想起させる。板に、液状にした粘土である泥漿を撒いて乾燥させ、その後、バーナーで表面を焼き、二酸化マンガンを顔料とした黒色を刷毛で塗り、再びバーナーで焼くという作業を幾度も繰り返す。釉薬のかからない器の素地が露出して火間となるように、下沢は窯を用いない独自の技法で、ひび割れや色の濃淡のある土肌を生み出し、内部から鈍い光を放つ、風化した自然の大地の姿を表した。一見重厚な油彩画のような作品だが、その成り立ちは伝統的な作陶の技術や土に精通した作家ならではの視点に支えられている。

本作は《Re-birth 湛》と並び、当館開催の個展のために制作された大型の平面作品の一つである。「風化から再生へ」と向かう生命の営みをテーマとする下沢の「Re-birth」シリーズでは、当館既蔵の作品のように立体作品が中心だが、本作は2016年頃から作家が取り組んでいる平面作品の最新作であり、コレクションの充実に寄与し得ると考えられる。

作家名	しもざわとしや	作品名	Re-birth いのちのかたち		
	下沢敏也		Re-birth 命のかたち		
	SHIMOZAWA, Toshiya				
生没年	1960-	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2025 年		
No Image		技法 材質	陶土、布、顔料、酸化鋇物		
		寸法	(A)133.0×120.0×80.0cm、 (B)129.0×80.0×82.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和7年度	エディション			
		号数	評価額	3,200,000	円

## 作家略歴

1960年北海道札幌市生まれ、在住。1978年より陶芸家の父・下澤土泡に師事。1982年、滋賀県信楽町(現・甲賀市)にて陶芸研修に参加。北海道陶芸協会の設立に携わった1984年頃、京都の前衛陶芸家グループ「走泥社」の作品に出会う。1990年に陶工房 shimozawa を設立し制作活動を本格化。1997年、北海道文化財団芸術家海外研修によりニューヨークのパーソンズ美術学校(Parsons School of Design)に通い、学生の自由な発想に影響を受けた。2001年以降は札幌に加えて全国各地のギャラリーで個展を開催し、国内外のグループ展にも参加。北海道の陶土を素材に、伝統的な作陶の仕事と独自の技法を用いた前衛的なインスタレーション作品の制作とを行き来しながら、造形表現の可能性を追求し続けている。

2009年、札幌文化奨励賞。2011年、北海道文化奨励賞。「下沢敏也 Re-birth 風化から森へII」(札幌芸術の森美術館 中庭・前池)。2013年、『下沢敏也作品集』(中西出版)出版(改訂版が2020年に出版)。2014年、「Sprouting Garden 一萌ゆる森」(札幌芸術の森美術館)出品。2021年、北海道陶芸協会第四代会長に就任。2023年、札幌芸術賞。2025年、「札幌美術展 下沢敏也 origin—土の命脈」(札幌芸術の森美術館)。

## 特徴

布を頭まで被り、身を屈めた人を表したような一対の作品。これまでの土や窯を用いた作品制作から脱し、液状にした粘土である泥漿に布を浸し、バーナーで焼成するという独自の技法で制作された。土はとところどころ黒く焦げ、その内部は虚空間となっており、抜け殻のような印象を与える。

本作は当館開催の個展のために制作されたインスタレーションを構成する一対の作品で、泥漿を塗って乾燥させた板(135×600cm程度)の両端に置かれていた。ひび割れた大地を虚ろな人型が見つめるという絶望的な光景が展開されるが、板の中央には潤いを湛えた水滴を垂らす流木のようなオブジェが配され、下沢が制作のテーマとしてきた「Re-birth」、死から生へ、「風化から再生へ」と向かう生命の営みが表現された。

「Re-birth」シリーズには、当館既蔵の石を切り出したような柱状の作品の他に、木、流木、さなぎなどの有機的な形態を表した作品もある。中でも本作は、東日本大震災の際、背中を丸め、泥中にうずくまって息絶えた人の姿を報道で目にしたことを契機に始まった人型作品群の最新作であり、コレクションの充実に寄与し得ると考えられる。

作家名	ひらかわのりみち	作品名	(non) semantic process [version with a driftwood on Shiraoi beach]		
	平川紀道		(non) semantic process [version with a driftwood on Shiraoi beach]		
	HIRAKAWA, Norimichi				
生没年	1982-	作品名 補足			
出生地	島根県	制作年	2024 年		
No Image		技法 材質	コンピューター、液晶ディスプレイ、木		
		寸法	可変		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 7 年度	号数	評価額	2,700,000	円

## 作家略歴

1982 年島根県生まれ、札幌市在住。2007 年、多摩美術大学大学院デザイン領域情報デザイン修了。2005 年よりコンピューター・プログラミングを用いた映像・音響インスタレーションを制作。2016 年のカブリ数物連携宇宙研究機構での滞在制作を経て、高次元空間における美をテーマとする「datum」を発表。近年は自然から抽出したデータを可視化／可聴化する作品を制作。2004 年、2019 年に文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞。2008 年、アルス・エレクトロニカ 2008 インタラクティブ部門準グランプリ受賞。[個展]human property (alien territory) pt.2 - works in progress (2022 年／Yutaka Kikutake Gallery、東京)、circular piece (2024 年／OMOTESANDO CROSSING PARK、東京)[グループ展]六本木クローニング 2019 (森美術館、東京)、札幌国際芸術祭 2024 (札幌文化芸術交流センター SCARTS)、Sensory Milieu (2025 年／G.MAP、光州)、リフレクションズーいつかの光 (2025 年／札幌芸術の森美術館)

## 特徴

本作は平川紀道が 2022 年から手がけているシリーズの一作。構成要素のひとつである流木は、平川が 2020 年の春に白老町で見つけ、形の面白さに惹かれて拾ったもの。平川はこの流木を撮影し、そのデジタル画像の各画素の明るさの値(0~255)をアルファベットの総数(26)で割った余りに対応するアルファベットに置換することにより、英字列に変換、その英字列を辞書と照合して存在する英単語を羅列し、英文を生成するプログラムを書いた。2 台のディスプレイには、流木を撮影した画像と、画素の明るさの値から生成された文字列から英単語を探すプロセスが映し出される。コンピューターの画面には生成された英文が流れる。そこに意味を持つ英文が現れる可能性はあるが、それは人間にとっての意味に過ぎない。通常の仕方とは別の方法で自然を捉え直してみるものの可能性と、人間が与える意味に回収されない自然のありよう、その両方が示唆される。平川が 2019 年に札幌市に拠点を移してから北海道で制作された作品であり、当館では初のメディアアート作品の収蔵となる。コレクションの幅を広げる意味でも収蔵の意義が認められる。

作家名	ひらかわのりみち	作品名	せつかふ / six petal autonoma [Mt.Moiwa, 2024, 4xLCD version]		
	平川紀道		雪花譜 / six petal autonoma [Mt.Moiwa, 2024, 4xLCD version]		
	HIRAKAWA, Norimichi				
生没年	1982-	作品名 補足			
出生地	島根県	制作年	2024 年		
No Image		技法 材質	コンピューター、液晶ディスプレイ		
		寸法	可変		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 7 年度	号数	評価額	5,600,000	円

## 作家略歴

1982 年島根県生まれ、札幌市在住。2007 年、多摩美術大学大学院デザイン領域情報デザイン修了。2005 年よりコンピューター・プログラミングを用いた映像・音響インスタレーションを制作。2016 年のカブリ数物連携宇宙研究機構での滞在制作を経て、高次元空間における美をテーマとする「datum」を発表。近年は自然から抽出したデータを可視化／可聴化する作品を制作。2004 年、2019 年に文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞。2008 年、アルス・エレクトロニカ 2008 インタラクティブ部門準グランプリ受賞。[個展]human property (alien territory) pt.2 - works in progress (2022 年／Yutaka Kikutake Gallery、東京)、circular piece (2024 年／OMOTESANDO CROSSING PARK、東京)[グループ展]六本木クロッシング 2019 (森美術館、東京)、札幌国際芸術祭 2024 (札幌文化芸術交流センター SCARTS)、Sensory Milieu (2025 年／G.MAP、光州)、リフレクションズーいつかの光 (2025 年／札幌芸術の森美術館)

## 特徴

本作は札幌国際芸術祭 2024 (SIAF 2024) に出品された作品をディスプレイバージョンとして再構成したもの。SIAF では、SONY のクリエイティブセンターが開発した体験型メディアプラットフォーム「INTO SIGHT」内で発表され、巨大な LED パネルと鏡によるトンネル型の空間での没入感ある鑑賞体験が注目を集めた。映像は、作家が札幌の藻岩山に登って撮影した雪景の画像とセルオートマトンと呼ばれる計算モデルにより制作された。白いピクセル群が、霜が広がるように画面を覆っていく。雪の結晶は、「六花」という言葉の通り六角格子状の構造を持つが、本作では六角格子に並んだピクセル同士が情報交換することにより、雪の結晶に似たパターンを生成し続ける。そのパターンは画像の明暗や色彩を反映するものの、完全な予測は難しい。雪の結晶の形成過程も、現代の自然科学でも完全に解明されていないという。制作の根底にはテクノロジーや科学によっても捉えきれない自然への畏敬がある。「雪花譜」は、かつて北大低温科学研究所の所長をとめた古川義純氏らによる 1995 年刊行の書籍の題。平川が札幌移住後に同地の自然を題材とした意欲作であり、当館での所蔵にふさわしい。